

有松

NO.57 2007. 10. 8. 有松まちづくりの会

◇手廻し蜘蛛蛇の目絞り (手廻し蟹蜘蛛または手廻し蜘蛛五分巻)



「話」「和」「輪」

有松まちづくりの会 会長 服部 豊

最近「三位一体」と言う言葉が良く使われる。我々が「有松まちづくりの会」として「有松・桶狭間観光振興協議会」の中心となって国土交通省の「観光地域づくり実践プラン」の選定を受けて、三年目となり有松桶狭間を一体として「戦さのみち」「絞りのみち」「町並みのみち」を三位一体として、現在は総合ガイドシステムづくりを実施して居り、「総合マップづくり」「総合サインづくり」「総合ガイドづくり」と此れも三位一体で制作を実施して居り又東海道の無電柱化に向けても行政と又住民の皆様との話し合いを続けて居ります。「安全」「安心」「快適」を三位一体とした町づくり「災害に強い町」「歩行者優先の町」「生活しやすい町」を目指して居り現在の日本は勿論世界がその方向に進んで居り有松だけが乗り遅れない様に住民の皆様のご御理解とご協力をお願い致します。

さて「話」「和」「輪」に就きましては、「話」とは皆様と話し合う事によって歴史も物語りも出来、それを聞く事によって、住民と来町者との間に交流し合う事に視点を置けば「観光交流」「空間づくり」「癒しの空間」が出来

て来ると思います。そして個の時代から集合の時代へと移り変化して来るのです。町づくりは一期一会から始まり、人と人との出会いを大切に「話」を広げて行きたいものです。

「和」と云えば日本製・日本風・日本語と日本的なハーモニーを表すのです。有松に於いて「和」を代表するものと云えば、「有松絞り」「町並み」である。有松絞りは御承知の通り「くゝり」と「染」であり「和」を代表する染と云えば藍染である。藍染の深い味わいは、素朴にしてしっとりとして、現在ではおしゃれさえ感じる日本古来の染色技術の深いものを感じるのです。

有松の町並み保存は「和」の中で保存と開発との変化の調和を心掛けてその目的は常に目的を考え常に新しい目標を発見し努力をすべきである。今の目標は前述の様に国交省の実践プランを達成し町の活性化に向けて前進あるのみです。

「輪」とは歴史を生かした町づくり、歴史は過去の通過点の積み重ねでも有るが、過去ではなく、今の私達も又絶える事なく日々新たに有松の歴史を刻み続けて居る。その輪を

町の中は勿論行政にも輪を広げて行かねばならないのです。此の様に集団的活動を展開する上で必要な事は持続可能で元気な会を運営する事である。話題が話題を呼びその中で和やかな友情が生まれ次第に輪を広げて行く事です。此れが「有松まちづくりの会」であり「有松桶狭間観光振興協議会」で有ると信じて居ります。

最後に、町は意図的につくられるものではなく、町は自律的に経過して行くものです。そこに存在する民家町並みは風土への産物だと思えます。町に緑を、自然を少しでも多く残す事です。町は便利になればなる程自然は遠ざかって行く。自然との共生を考え「話」「和」「輪」の良い町を皆様と共に目指して参りましょう。来年は有松の町も開村四〇〇年を迎え、又桶狭間も二〇一〇年には桶狭間の合戦四五〇年を迎える大変大きな節目となつて参ります。その日を迎える前に少しでも町を整備し、町が一段と輝く様住民の皆様と共に頑張つて行かねばなりません。

町づくりは道づくりから始まるのです。そしてその先には古里を残す為の重伝建を目指して行かねばならないのです。

環境が良くなればなる程、次世代を引継ぐ若い人達も此の町に住みたいと云う気持が自然に湧いて、自慢の出来る古里を守って行く事が出来るのです。

心地よい空間づくり

名古屋市有松都市整備事務所長 三宅光治

有松都市整備事務所長に就任して早半年が経ちました。みなさまには平素より当事務所の事業につきましてご理解とご協力をいただき、ありがとうございます。

先般「有松東海道無電柱化の会」が行った無電柱化に関する意向調査では地域のみなさんの率直なご意見が多数寄せられたと聞いています。無電柱化は有松の歴史的景観との調和を図りつつ、安全、快適な歩行空間を確保することが目的であり、行政担当者といたしましても地域のみなさんと共に事業を進めていきたいと考えています。

★まちなみ・絞り―地域財産の醸成

ところで、街の魅力を語るとき、よく用いられる言葉に「センス・オブ・プレイス (Sense of place)」というのがあります。その場所ならではの雰囲気・魅力という意味です。それは建物や歩行空間だけではなく、そこでな

される人々の毎日の暮らしや活動、目に見えない風や音、歴史などが時間とともに積み重なってつくられるものです。「なんとなく落ち着く」、「懐かしい感じがする」、このような言葉でうまく表現できるものではないかもしれませんが、居心地のよい場所というのは多くの人が理解できるのではないのでしょうか。モノは時間とともに変化し古くなっていきますが、それとともに味わいを増し、成長していく空間は好ましいものであると思います。

東海道の歴史的まちなみや、伝統産業である有松絞りは長い時間を経て、より一層味わいのあるものへと変化し続けていると思います。これらの財産をさらに熟成させていくことが今後の有松地区のまちづくりには必要不可欠ではないでしょうか。

★原動力は地域のみなさん

また、モノづくりだけでなく、文化や芸術、



環境やアメニティ、交流や他文化共生といったソフト面がますます重要になってきている昨今、まちづくりは地域が主体的に関わり、一体となって進めていかなくてはなりません。安全、安心な環境を作り出す原動力となるのは地域のみなさんです。現在検討している東海道の無電柱化についても、電柱をなくし、道路を整備することはハード面ですが、誰もが安全、安心に歩けるといいうメリットはソフト面における充実です。生活者だけでなく初めて訪れる人にとっても快適な歩行空間は、有松地区全体の魅力をさらに高めていくことにつながります。居心地のよさというものは安全や安心といったものが根底にあるからこそ生まれるものだからです。

全国各地でさまざまな手法によるまちづくりや町おこしが行なわれていますが、どこも同じであるはずはありません。有松地区ならではのまちづくりを地域のみなさんと共に進めていくよう、事務所の所員一同職務に励んでいきたいと考えています。

▼重伝建先進地に学ぶ▲

鳥取県倉吉市打吹玉川地区

鳥取県教育委員会事務局 文化財課文化財係 松本 絵理

今年の八月には突然お邪魔したにも関わらず、有松の皆様には快くお迎えいただきありがとうございました。間口の広いお宅が多く、東海道沿いの町ならではの発展の様子が伝わってまいりました。随分残りも良く、未選定にも関わらずこれだけの状態を守られた、地元の方のお志の高さに感銘を受けました。今後の選定によって修理・修景が進めば、より素晴らしい町並みに会えることでしょう。その時を心待ちにしております。

さて、鳥取県には現在、国選定の倉吉市打吹玉川重要伝統的建造物群保存地区の他、県選定の智頭町板井原伝統的建造物群保存地区があります。この度は、有松同様に商家からなる打吹玉川地区についてご紹介させていただきます。

◎倉吉の歴史

倉吉市は鳥取県中部に位置し、中世には打吹山に城が構えられ、城下町として発達しました。江戸時代に廃城となつてからは、鳥取池田藩の家老荒尾氏が陣屋を構え、交通の拠点として繁栄しました。近代に入つてからは商業都市となり、現在は主に明治から昭和戦前までの町並みが残っています。打吹山を背

景に形成された町中を玉川が流れ、川沿いに土蔵が並ぶことから、通称、白壁土蔵群として親しまれています。

◎町並み保存の歩み

昭和五十四年度に町並み対策調査が行われ、平成十年によく重伝建地区の選定を受けました。翌十一年度からは毎年約五件程度の修理・修景が行われ、約十年経った現在では、行政主導の保存修理事業から民間主体となりつつあります。

ところが、平成十五年五月に伝建地区内で火災が発生し、幸い人命は失われませんでした。しかし、四棟の建物が焼失しました。しかし、この火事をきっかけに住民の方々自らがどのように地域を守るか、より真剣に考えるようになり、火災から半年後に町並み保存会が設立されました。その後、焼け跡の一部に防災センター機能を有する「くら用心」が建てられ、自主防災会の拠点として定期的に消防訓練を行う他、まちづくりの一拠点として用いられています。

◎現在と今後

住民の方の意識が高まった他、U・Iターンで定年後に倉吉での生活を希望される方も

徐々に現れはじめました。これは、住民の方と倉吉市とが協力し、観光ではなく住環境の向上を目的として行ってきた、これまでの取り組みの成果と考えています。また昨年には、これまでの修理事業の経験をもとに、地元的设计士や左官、大工などの職人による「匠のつどい」が設立され、文化財修理に関する情報交換や技術の向上を図っています。その他、前回の町並み対策調査から二十五年以上経過し、取り巻く環境も以前と変わった事から、今年度からは既選定地区とその周辺地区で見直し調査が行われています。

このように選定後約十年のうちに様々な動きがありました。これからも多くの方と協力しながら、実態にあった整備を進めていきたいと考えております。



▲伝建地区写真

有松 界限

(23) 東海道と栽松庵

来年、平成二十年に有松は開村四百年を迎える。有松の原点は東海道にあった。

徳川家康は関ヶ原の合戦に勝利すると慶長八年（一六〇三）江戸に幕府を開き京都と江戸を結ぶ東海道の大改修を行った。

もともと東海道は畿内と東国の往還として古代より通じていた。鎌倉幕府（一一九二）が成立すると、京都と鎌倉との交通は盛んになり旧来の東海道を鎌倉街道と呼んでいたものである。

天武天皇十四年（六八六）に「東山道」は美濃以東、「東海道」は伊勢以東と呼ばれた

のが最初である。

この街道は東山道より一宮、清洲、萱津（甚目寺）を経て名古屋市域を西北から鳴海地内を東南に通じ二村山から三河へ抜けた。

家康は信長、秀吉の交通政策を継承し東海道に伝馬制度を定め幹線道路の、この東海道を大きく南下移動させ、西より鳴海、桶狭間村の北端、地鯉鮒（知立）と連なる新たな東海道が通った。

尾張藩は、慶長十二年以来家康の第九子徳川義直の領有するところであり本年が給地四百年である。

慶長十三年尾張藩は知多半島一帯の百姓、庄屋中にお触書を出し税免除による特典を与えて、桶狭間村北端の「あらまち」への移住を促した。これにより阿久比の庄より庄九郎を始めとする人々が移住してきた。有松村の誕生であった。庄九郎は東海道にて何か物造りをと考え苦心の末絞り染の開発に成功した。天明の大火にあいながら村人一同の努力により九九利染として東海道の名産となつてゆく。

塗籠造の豪壮な建物は東海道に軒を並べて建ち、表店は旅人で、上級武家、公家、寺院は横の門から書院に入り商談を進め茶室で客

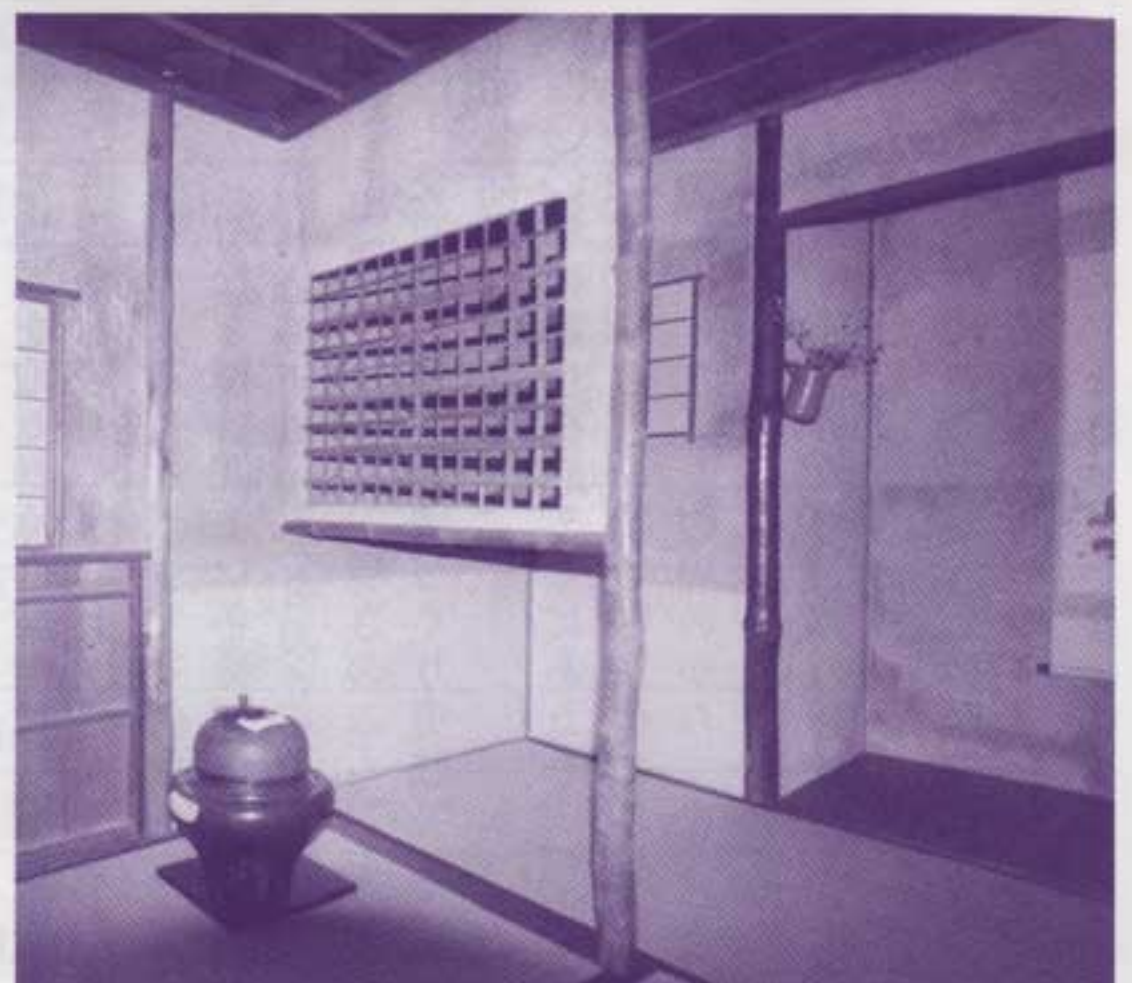
をもてなしたものである。

栽松庵は竹田嘉兵衛邸にあって広い裏庭の木立に囲まれた一隅にある。この茶室は初代竹田庄九郎当時のものではないが少なくとも二百年ぐらいを経ている。

文久三年（一八六三）十四代將軍家茂上洛の折この茶室で休まれている。明治十四年には勝海舟も立寄られ書を揮毫されている。多くの文人墨客が来有され、来年は開村四百年であり色々多くの行事があり、機会を見逃さず一度は竹田邸栽松庵にお越し下さればと思っております。

（成田 治）

※ 栽松庵茶室 写真提供は福岡友一氏



「すべては誇りうる

ふるさとのため、

みらいのために。」

有松開村四〇〇年記念実行委員会 副実行委員長 藤 枝 静 次



すべては誇りうる
ふるさとのため、
みらいのために。

有松は慶長十三年（一六〇八）
尾張藩の御触書により

つくられました。

知多郡之内桶狭間村新町之儀、諸役令免許候
間望之者ニ於テハ被地へ可越者也仍如件

慶長十三年二月十八日

寺西藤左衛門・原田右衛門

有松は平成二十年（二〇〇八）には誕生か
ら数えて四〇〇年となります。これほどはっ
きり新町が標記される町はめずらしく稀代の

ことと考えられます。

桶狭間村は一五六〇年に織田信長と今川義
元の戦いが繰り広げられ、日本が統一への幕
開けとなった歴史的資産であり今に残る合戦
の地です。

有松は東海道沿いではありましたが、桶狭
間村の北側丘陵の谷間で耕作には不向きな人
里離れた寂しい土地でした。ここに御触書が
発せられ、知多の阿久比より竹田庄九郎をは
じめとした人々が移住し現在に至っていま
す。

庄九郎らは土地が農業に向かなかったこと
から、九九利染職人の技術を取り入れるなど
苦労を重ね有松絞りを創り出しました。絞りは
東海道を行き交う旅人の人気を得て有松の
名産品としてもはやされました。

天明四年（一七八四）には大火で村の大半
が焼失しましたが、尾張藩の手厚い庇護と村

人の努力で防火に配慮した総瓦葺・塗籠造り
とし虫籠窓・海鼠壁・卯建を特徴とした町並
みができました。今も当時の面影を残した江
戸時代の建物が面として存在する日本で唯一
の町となっております。

しかし、町の産業である伝統的工芸品の「有
松鳴海絞」も人々の価値観の変化や着物人口
の減少で需要が減り、後継者の育成も困難に
なり生産高も全盛期（昭和四十年代）の七割
位まで減少しています。

町並みもライフスタイルの変化や増大する
維持経費の負担に、最近江戸時代の建物を含
む四件が取り壊されてしまいました。このま
ま放置すれば貴重な地域の財産（町並み）が
消滅してしまうという危機感を抱いています。

近年は地域を取り巻く商業環境も有松駅を
はさむ再開発と区画整理によって大きく変化
し、東海道の人通りが減少する傾向となっ
ています。有松と桶狭間では各種団体が観光を
キーワードに振興協議会を設立し、「絞りの
みち」「町並みのみち」「戦さのみち」を基軸
に国土交通省の観光地域づくり実践プランを
策定し活動しています。

四〇〇年の節目を迎えるにあたり、将来に
誇れる環境にやさしい新しい文化あふれる有
松を創っていききたいとの願いから「すべては
誇りうるふるさとのために」、未来のために「
をテーマに、地域の人々と協力して様々な事
業を計画いたしました。

多くの人々にこの素晴らしい歴史と伝統が
いっぱい有松・桶狭間を知ってもらい訪れ
ていただきたいと願っています。

「すべては誇りうる

ふるさとのため、

みらいのために。」

有松開村四〇〇年記念実行委員会 副実行委員長 藤 枝 静 次



すべては誇りうる
ふるさとのため、
みらいのために。

有松は慶長十三年（一六〇八）

尾張藩の御触書により

つくられました。

知多郡之内桶狭間村新町之儀、諸役令免許候
間望之者ニ於テハ被地へ可越者也仍如件

慶長十三年二月十八日

寺西藤左衛門・原田右衛門

有松は平成二十年（二〇〇八）には誕生か
ら数えて四〇〇年となります。これほどはっ
きり新町が標記される町はめずらしく稀代の

ことと考えられます。

桶狭間村は一五六〇年に織田信長と今川義
元の戦いが繰り広げられ、日本が統一への幕
開けとなった歴史的資産であり今に残る合戦
の地です。

有松は東海道沿いではありましたが、桶狭
間村の北側丘陵の谷間で耕作には不向きな人
里離れた寂しい土地でした。ここに御触書が
発せられ、知多の阿久比より竹田庄九郎をは
じめとした人々が移住し現在に至っていま
す。

庄九郎らは土地が農業に向かなかったこと
から、九九利染職人の技術を取り入れるなど
苦労を重ね有松絞りを創り出しました。絞りは
東海道を行き交う旅人の人気を得て有松の
名産品としてもはやされました。

天明四年（一七八四）には大火で村の大半
が焼失しましたが、尾張藩の手厚い庇護と村

人の努力で防火に配慮した総瓦葺・塗籠造り
とし虫籠窓・海鼠壁・卯建を特徴とした町並
みができました。今も当時の面影を残した江
戸時代の建物が面として存在する日本で唯一
の町となっております。

しかし、町の産業である伝統的工芸品の「有
松鳴海絞」も人々の価値観の変化や着物人口
の減少で需要が減り、後継者の育成も困難に
なり生産高も全盛期（昭和四十年代）の七割
位まで減少しています。

町並みもライフスタイルの変化や増大する
維持経費の負担に、最近江戸時代の建物を含
む四件が取り壊されてしまいました。このま
ま放置すれば貴重な地域の財産（町並み）が
消滅してしまうという危機感を抱いています。

近年は地域を取り巻く商業環境も有松駅を
はさむ再開発と区画整理によって大きく変化
し、東海道の人通りが減少する傾向となっ
ています。有松と桶狭間では各種団体が観光を
キーワードに振興協議会を設立し、「絞りの
みち」「町並みのみち」「戦さのみち」を基軸
に国土交通省の観光地域づくり実践プランを
策定し活動しています。

四〇〇年の節目を迎えるにあたり、将来に
誇れる環境にやさしい新しい文化あふれる有
松を創っていききたいとの願いから「すべては
誇りうるふるさとのため」に、未来のために「
をテーマに、地域の人々と協力して様々な事
業を計画いたしました。

多くの人々にこの素晴らしい歴史と伝統が
いっぱい有松・桶狭間を知ってもらい訪れ
ていただきたいと願っています。

伝えよう 心とかたちのまちなみ文化

第30回 全国町並みゼミ伊勢大会

「第30回全国町並みゼミ」が九月十四日、十六日の三日間、三重県の伊勢市で行われました。

有松まちづくりの会から服部豊会長以下、数名が参加、揃いの紋り法被のお陰か、TVニュースにも登場させて貰えたようです。

さて、伊勢市はお伊勢参りのにぎわいとともに栄えた神の都・神都です。大会冒頭の森下伊勢市長の挨拶にあったように、伊勢は、太古の昔より「うまし國」と呼ばれ、伊勢神宮の懐に抱かれて、悠久の歴史を育んできたところでは。日本書紀、万葉集にその名を記す町、町そのものが歴史であり、文化遺産なのです。

さて、全国町並みゼミは、第一日目の開会セレモニーのあと、神宮司長 広報課長 河合真如氏の基調講演「式年遷宮と伊勢のまち」がありました。常に二十年を限りて、一度、新宮に移し奉るという式年遷宮の意味と神領民との関わり、歴史などが語られました。

つづいて、伊勢からの報告と題して、伊勢の町並み保存運動の歩みを「伊勢河崎まちづくり会」理事長の高橋徹氏が、スライド写真などを使って報告されました。

●内宮鳥居前町おほらい町の町並み再生によるまちづくりとおかげ横町

平成元年、伊勢市は「町並み保存条例」を制定、おほらい町はその保全地区指定を受けて、無電柱化工事、道路再舗装（石畳）を行い、また、ほぼ同時にオープンしたおかげ横町ともども、今では年間三五〇万人を超す観光客が訪れる町となっている。

●勢田川沿いの問屋街・河崎の歴史的町並み保全。町並み保存の危機を訴え、「商い」をキーワードにまちづくりを進める。

●その昔、皇族などが海水浴で利用された資日館をメインに全国からの修学旅行生で賑わった二見浦表参道の旅館街の活性化。

●平成二十年春には、中部国際空港と伊勢を結ぶ定期航路が開設されるが、再び海の玄関になる神社港の歴史的町並みと港にまつわる多彩な物語を活かしたまちづくり等々です。

その後行われた各地からの報告は、中山道の宿場町として知られる妻籠、古都奈良の町屋街の再生に取り組む奈良町の活動、東海道の関宿の一体としての町並み保存の楽しさ、難しさのレポート。そして、美しい瀬の浦の保

存のため行政を相手に「瀬の浦世界遺産訴訟」を行う「瀬まちづくり工房」の取り組みなどが報告されました。

そして、第二日目は九つのテーマについて、九つの会場にわかれて、「町並みの保存と技術の伝承」「ものづくりとまちづくり」「町屋の再生活用と町並み文化」などのテーマについて議論を深めました。例えば、運動を進める住民の立場から、あるいは指導する行政の立場から、住民の生活と町並み保存との溝、ギャップなど、日頃、運動を進めていく上で様々な問題についての真剣な話し合いでした。

有松の町並みでは、このところ、ようやく有松・東海道の無電柱化の機運が盛り上がり、「有松・桶狭間観光開発」プロジェクトチームの活動が活発化しています。今回の全国町並みゼミで行われたこうしたさまざまな議論を、大いに参考にしたいと思っています。（鶴飼 満）



正念場を迎える東海道無電柱化 住民合意、焦点は「一方通行化」問題

いま、「有松東海道無電柱化」は大きな正念場を迎えています。このほど「有松東海道無電柱化の会」が行った「東海道無電柱化の意向調査」によると、回収率は七七%で、このうち無電柱化に対して、東町第一、中町、西町三町民の七割が理解を、そして、三割が難色を示したとしている。「難色」の主な理由は交通問題で、「生活に不便」、「迂回路がない」、「脇道への影響」、「三〇二号が開通してから」、「なぜ必要か」などで回答者のうち約二割が「一方通行化」に明確に反対し、ひいては「現在の東海道無電柱化事業計画案」に「よい案だと思わない」としたとしている。このような状況を見ると、「有松東海道無電柱化」は現在、「一方通行化」問題に焦点が絞られてきてみるとみられる。そこで、東海道無電柱化の現状を「一方通行化」と「まちづくり」の二点で整理してみることとします。

★「無電柱化と一方通行化はなぜ一体か」

論点の一つは「有松東海道無電柱化事業」がどのようなしくみで成り立っているかということとです。そもそも、この事業は地域住民の要望に応え、名古屋市が現下の有松駅前市街地再開発事業、有松土地区画整理事業、街路事業など「有松地区総合整備事業」の一環として、公的資金を導入し、国の「電線共同溝の整備等に関する特別措置法（電線共同溝法）」に基づいて行うものです。「電線共同溝法」によると、「特定の道路について、電線共同溝の整備等を行うこと

により、当該道路の保全を図りつつ、安全かつ円滑な交通の確保と景観の整備を図ることを目的とする」と規定され、「歩道のない道路について、電線を地中化し、電柱を撤去することにより、歩行者空間を拡大し、歩行者、自転車の安全かつ円滑な交通の確保を図る」ことを第一義としている。これに照らすと、幅員が平均五・五mの現東海道で無電柱化を図ろうとする場合、歩行者空間の拡大、歩行者の安全かつ円滑な交通を確保するために、自動車の「一方通行化」は避けられないということとです。もっと端的に言えば、有松において「歩行者の安全」イコール「一方通行化」は町並み「景観の整備」等に優先し、「双方向化」を求めれば、無電柱化は成立しないということに他ならないと考えられます。

★わたしたちが望む、「まちの姿」

双方向ができないのであれば、無電柱化を諦めるのですか。それでは、これからどのような「まちの姿」を望むのですかということが第二の論点となります。

考えてみて下さい。自分の住むまちに歴史的な「町並み」と広重の浮世絵にも描かれた「東海道」、そして地場産業の「絞り」と近世の幕開けを告げた「桶狭間の戦い」があります。これほどのまちはあまたある日本のまちのなかで、類稀です。このことは小さいと言えども、このまちに住むわたしたちの自慢じゃないですか、誇りじゃないですか。「光」が足りないのなら、わたしたち

でもっと磨きましようよ。

一言で、安心、安全、快適なまちづくりと言いますが、どのまちもこれらをどうしたら、具現化できるのか、みんな苦慮しています。そんななかで、いま、わたしたちには無電柱化の機会が与えられています。それはこの町並みと東海道がわたしたちだけでなく、名古屋市民にとって大切なもの、共有の財産と受けとめられるからでしょう。

町並みと東海道、絞りと桶狭間の戦い―わたしたちがこのまちに住む、こころの拠りどころとなっているのではないのでしょうか。自信と誇りと愛着の前では小異は小異として越えられるのは。また、ふるさとづくりの大義の前ではこの「一方通行化」問題を克服し、「東海道無電柱化」実現にとつての隘路を打開していきたいと考えます。

★美しい町並み、

居心地のよい東海道は「まちの顔」

「無電柱化と一方通行化はなぜ一体なのか」、そして、「わたしたちが望む、まちの姿は何なのか」を考えてきました。

ひとにやさしいまち、美しい町並み、居心地のよい東海道はわたしたちまちの象徴です。このたびの長い、長い話し合いが誇りと愛着のまをを一層育み、あのとときの英断が今日の「価値あるまち」を伝えた、後世に語られることをわたしたちは確信したいものです。

（有松まちづくりの会 副会長 永井 鎮）

「東海道無電柱化と有松の町並み」をテーマに六月二十五日、講演会が開催されました。

前犬山市長 石田芳弘氏

㈱アトリエ74建築都市計画研究所 佐々木政雄氏

東京大学大学院工学系研究科教授 西村幸夫氏

の三氏を講師にお迎えし、大盛会となりました。

有松まちづくりの会

平成十九年総会を開催

平成十九年総会が五月十七日(木)に来賓の方々をお迎えして、有松鳴海絞会館で開催されました。当日は会員が多数出席しました。

平成十八年度事業報告・収支決算並びに監査報告、平成十九年度事業計画・収支予算案、役員改選の議案が順次進行し総て承認されました。

総会終了後は、「博物館の舞台裏」をテーマに名古屋博物館 学芸員 山本祐子氏の講演会がありました。

史料はひとつの方向だけでなくいろんな方向から見ると光り出すと山本氏は述べられました。博物館で書物を展示したとき、くずし字で一見しただけではわからない場合でも解説を加えると人の興味を引くそうです。

また物にはそれにまつわるストーリーがあり、例を挙げて話して下さいました。

名古屋の貸本屋、大野屋惣八の『大惣本』にある書き込み、伊藤次郎左衛門家に伝わる『琴の日記』、落語『はてなの茶碗』は、楽しく興味深い話でした。

このような裏にあるストーリーを見付け出し、読み取るという博物館の仕事の大きさを改めて知ることができました。

最澄の言葉「一隅を照らす」の詳解で締めくくられた講演は、歴史を意識して暮らす有松の会員にとって大変有意義でした。

(伊藤弥生)

平成19年度事業計画 (平成19年4月1日～平成20年3月31日)

- 目標 本会の永年の懸案である ①重要伝統的建造物群保存地区選定
②東海道無電柱化の推進
③一里塚復元の実現
以上の項目の実現に向け努力してまいります

役員会	4月6日	月初めに実施
第12回 春総会中	4月15日	本丸御殿の再建をめざして
町並み研修会	4月25日	ならまちと柳生の里を訪ねて
平成19年 総会	5月17日	平成18年度事業報告・収支決算書承認 平成19年度事業計画・収支予算案承認
講演会	5月17日	テーマ「博物館の舞台裏」 講師 名古屋博物館 山本祐子氏
役員・世話人会	5月17日	
第23回有松祭りまつり	6月2・3日	有松あないびとの会 町並み案内 有松よもやま話 第10号作成
懇話会	7月	教育委員会文化財保護室 有松都市整備事務所
歴史勉強会	7月	古典芸能鑑賞・納涼落語会
第30回全国町並みゼミ	9月14・15・16日	三重県伊勢市 開催
全国ボランティア会議	9月22・23日	名古屋市にて開催
会報(有松)発行	10月	第57号 2,500部
国土交通省中部ブロック大会	10月	
第26回歴史勉強会	11月	朝鮮通信使 東海を行く(未定)
役員・世話人会	1月	
懇話会	2月	教育委員会文化財保護室 有松都市整備事務所
第27回歴史勉強会	3月	未定
会報(有松)発行	3月	第58号 2,500部

有松観光開元振興協議会・有松東海道無電柱化の会・開村400年実行委員会 随時参加

平成18年度事業報告 (平成18年4月1日～平成19年3月31日)

役員会	4月4日	本年は毎月、月初めに行う
町並み研修会	4月12日	遠州大須賀と日坂宿、由比宿を訪ねて
第12回春総会中	4月16日	本丸御殿の再建をめざして
名鉄街かど物語	4月23日	絞りの歴史的文化と風情ある町並みを歩く
着物を着る習慣を作る協議会	4月23日	着物の似合う町 有松を歩く
平成18年総会	5月19日	平成17年度事業報告 決算承認 平成18年度事業計画 予算案承認
講演会	5月19日	「祭りと着物」 講師 南山大学教授 安田文吉氏
役員・世話人会	5月19日	
第22回有松祭りまつり	6月3・4日	有松あないびとの会 町並み案内 有松よもやま話 第9号作成
懇話会	7月21日	教育委員会文化財保護室 有松都市整備事務所
役員・世話人会	7月21日	
電柱無柱化勉強会	7月29日	有松まちづくりの会 会員
歴史勉強会	7月29日	古典芸能鑑賞・納涼落語会
役員研修会	8月24日	大山市市長訪問、復元の磯部郡見学
設立総会	9月8日	有松東海道無電柱化の会
第29回全国町並みゼミ	10月6・7・8日	福岡県八女福岡を中心に開催される
会報(有松)発行	10月20日	第55号 2,500部
第24回歴史勉強会	11月15日	福狭間村由来記 講師 梶野 渡氏
役員・世話人会	1月19日	
文化財防火デー	1月26日	緑消防署、有松学区防災安心まちづくり委員会
開村400年準備会	2月22日	平成20年有松開村400年
開村400年実行委員会	3月16日	記念事業、発足
会報(有松)発行	3月30日	第56号 2,500部

有松観光開元振興協議会・有松東海道無電柱化の会・開村400年実行委員会

町並み点描(五)

名古屋鉄道 有松変電所

名鉄名古屋本線有松駅から東へ八百メートル北側に、現在は無人化されている有松変電所がある。

戦前からある建物で地元ではよく知られている。名鉄本社 広報宣伝部によれば竣工は大正十二年(一九二三)四月一日で同日供用開始されたとのこと。

高圧線より受電し一五〇〇ボルトの直流に変え本線の知立堀田間が送電区域で、上下六百本近く行き交う列車にエネルギーを供給している。

今回は日ごろ何気無く利用している公共交通の要所を紹介しました。八十四年の歴史を刻んだこの施設が将来文化財として評価されることを一市民として期待しております。

(藤島繁博)



愛を知り 愛を育む

ボランティア



秋空の九月二十三日「第十六回全国ボランティアフェスティバル あいち・なごや」の分科会 観光ボランティアガイドと歩く尾張名古屋歴史と文化を訪ねてくが有松で行われました。

秋田、茨城、石川、富山など日本各地からいらした皆さんは九時に有松駅に集合。「有松あないびとの会」の案内で、服部邸裏庭から有松・鳴海絞会館、中町山車庫見学を経て長坂道をまわり、中枡の森から竹田邸へと二時間ほどの町

並み歩きを楽しみました。竹田邸茶室では絞り浴衣に身を包んだ「有松あないびとの会」会員による抹茶の接待も行われ、参加者の方々は「有松ならではのもてなし」と



感激の面持ちでした。

昼食後、交流会への参加のため白鳥の名古屋国際会議場へ移動する際には、八名で参加されていた「土岐市ボランティア連絡協議会」の皆さんのご好意で、参加者全員が土岐市の皆さんの観光バスに便乗させていただき、和気あいあいの車内ではより一層親交を深めることができました。

交流会では「有松あないびとの会」「東区文化のみちガイドボランティアの会」及び外国語ガイドボランティア「愛知善意ガイドネットワーク」よりそれぞれの活動報告や抱える課題点などの発表があり、広く観光ガイドボランティアについての話し合いがなされました。

今回のボランティアフェスティバルを通して、他地区で活躍しておられるガイドの皆さんの熱意に刺激を受けると共に、今後益々のガイドボランティアの必要性を感じました。そして全国各地からはるばる有松へお出掛けくださった方々から寄せられた多くの激励の言葉に「有松流おもてなし」への期待の大きさを感じた次第です。

(加藤明美)

mamaru cafe ママルカフェ



有松・鳴海絞会館一階に今年七月に開店致しました「mamaru cafe」です。「mamaru」とは「まる」すなわち円をもじった言葉で、有松の皆様の憩いの場、ホッと一息つけるやすらぎの場を目指して努力していきたいと思っております。

ハンバーグやパスタ等、洋食をベースにしつかりとした食事からデザートやサンドイッチ等の軽食まで様々なメニューをご用意しております。特に、ハンバーグは、和牛一〇〇パーセントの自家製で、デミグラスソースとの相性は抜群です。季節に応じたメニューで皆様に楽しんでいただける様、一つ一つ手作りで提供しています。お近くにお越しの際は、お気軽にお立ち寄り下さい。

森近 哲夫

営業時間

8時～20時

モーニング

8時～10時30分

ランチ(土日有)

11時～14時

定休日 水曜日

電話番号

六二一―三―三三四



歴史を勉強する会のお知らせ

◇日時 十一月十五日(水)

◇会場 緑生涯学習センター有松分館

◇講師 堀崎 嘉明 氏

◇演題 「朝鮮通信使 東海道を行く」

7月21日(土)
「納涼寄席」
暑さを笑いで吹っ飛ばし
大いに盛りあがった一夜。



4月25日(水)
「町並み研修旅行」
傘の花咲く中 奈良町を
そぞろ歩きました。



俳句

宿場町 熊崎 保江

秋晴や宿場の町に山車九台
芭蕉像拝す御堂に秋の風
秋草やかたつて宿場でありし町

- ◆主な来訪者◆
- 中国学生と日本の大学 地域交流委員会
 - 愛知シルバークレッジ 鯉城大学OB会
 - 大阪 堺中区老人会
 - 大阪 (株)日興トラベル
 - 豊田 市役所 自治振興課
 - 静岡 細江町ボランティア連絡協議会
 - 名古屋 西鯉城会
 - 多治見 街並探偵団 古瀬戸公民館
 - 大阪 愛知の旅物語 ものづくり王国
 - 和歌山 紀州鉄道(株)
 - 兵庫 アゴラの会
 - 三重 三重テレビ
 - 名古屋 銀化の会 中原道夫先生と吟行
 - 東丘 和歌の会
 - 桶狭間 長福寺檀家の皆様
 - 豊田 市民芸館 友の会
 - 愛知 ハナノ木
 - 一宮 野口南 長生クラブ
 - 半田 市博物館 友の会
 - 岐阜 みたけ町 婦人の会
 - 高年大学 郷土研究
 - 有松 有松卒業生 いっぱち会
 - 東京 クラブツーリズム愛知うまいもの
 - 静岡 大須賀おもと会
 - 福井 退職公務員連盟 鯖江支部
 - 滋賀 東近江市五個荘
 - 名古屋 東区文化の道 白壁ガイドの会
 - 豊田 三州足助ガイドの会
 - 全国ボランティアフェスティバルあいち・なごや
 - 社会研究クラブ
 - 審心会
 - 穂波学区女性部

編集後記

今、全国で広く行われている歴史的町並みの保存運動の先駆けはなんとこの有松からだったといえます。今から三十余年前、有松の旧家の当主たちによって始まったこの動きは、やがて『全国町並み保存連盟』の創設、さらには、伝統的建造物群保存地区制度(伝建制度)の先駆けともなったようです。

昭和五十年(一九七五)に制定され、現在、全国で七十九の地区がこの重伝建地区に選定されていますが、残念ながら、この有松の町並みは、未だに選定を受けるに至っていません。

こうした中、今、有松では、有松・東海地区の電柱無柱化事業と、国交省の支援を受け有松・桶狭間両地区にまたがる『観光地域づくり実践プラン』を強力に推し進めています。『有松』誌面で、その息吹の一端でも伝えられましたでしょうか。(鶴飼 満)



切り絵「有松の町並み(西町・河竹小路)」 豊田信行

発行 有松まちづくりの会

〒458-0901 名古屋市緑区有松町橋東南(有松商工会内)

TEL (052) 621-0178

FAX (052) 622-7401